

南方熊楠全集

6

南方熊楠全集

6

平凡社

南方熊楠全集（全一二巻）

第六巻 新聞隨筆・未發表手稿

定価 二八〇〇円

昭和四八年 六月三十日 初版第一刷発行

著者 南方熊楠

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地

電話（二六五）〇四五二

振替 東京 二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

© 岡本文枝 1973

0339-429060-7600

凡 例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、隨筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集成することを目指した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方隨筆』『統南方隨筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。

2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。

3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。

4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録索引を付載する。

5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た↓あつた 名く↓名づく 息ず↓息ます など）のように、読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（惟↓怪 耻↓恥 咀↓詛 など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「」に対し小さい「」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、ヂ↓ジ ヅ↓ズ などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『』、論文名には「」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は、
論文名は、に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあつて著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は「」をもって示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、
〔著者書〕と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文または書簡の末尾に注記を付した。

本書（第六巻）は、『牟婁新報』以下八紙の新聞および『週刊朝日』に掲載された随筆と、未発表手稿とを収録する。一般に新聞に発表された随筆は、諸雑誌に掲載されたものと重複することが多く、それをやや平易に書き改めたものも少なくない。そのため、また紙幅の都合もあって、「神社合祀反対意見」（『牟婁新報』）等を割愛し、量において全体の約六割を収録した。この選択については国立国会図書館の杉村武氏の御教示を仰いだ。なお最終巻（別巻第二）に新聞随筆全部の目録を掲載する。

配列は、『牟婁新報』掲載のものが大半を占めるため、掲載紙別にせず、「田辺随筆」「田辺通信」「南方先生百話」の三種の連載もの、地方行政に関するもの、動植物を扱ったもの、比較古語関係のもの順にまとめ、それぞれのジャンル内で発表年月日順に配列し、ごく短いものは小篇として末尾に配置した。数回にわたって分載されたものの発表年月日は、まとめて掲載紙名とともにその篇末に記したが、区切りごとに一行あけて一日分がわかるようにした。なお、掲載の順序を誤って発表されたものが若干あり、これらはスクラップ・ブックに見られる著者の書きこみ等によって順序を整えて収録し、篇末にその旨を注記した。

iii 凡 例

テキストに関しては、南方家蔵の一六冊のスクラップ・ブックを中心に、柳田国男氏のスクラップ・ブック（岡茂雄氏蔵）、乾元社版全集編集の際に作られた筆写稿によったほか、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、田辺市立図書館、和歌山県立図書館、大阪毎日新聞社資料部の御協力をいただいた。

未発表手稿三九篇は、生前、雑誌・新聞等の印刷物に発表されなかったものであるが、「大きな蟹の話」、「自分を観音と信じた人」、および小篇（ほぼ二千字以内のものをまとめて収録した）中の「守宮もて女の貞を試む」、「狼が人

の子を育つること」、「桃栗三年」、「蛙を用いて毒を試む」の計六篇は、死後刊行された乾元社版全集に収録されており、また小篇の「読「夢想兵衛輪講」追加」も、同全集に三田村玄竜宛書簡という形で収録されている。その他は、すべて今回初めて公表されるものである。

これらの手稿は、大別すると、著者が『続々南方隨筆(仮題)』のために新たに書き下したと見られるもの、諸雑誌に寄稿したが諸種の事情で掲載されなかったもの、さらに改稿するつもりかまたは未完のまま篋底に秘せられていたものの三種に分けられる。残された原稿が途中までしか存在しないもの——たとえば第八葉の末尾まで書かれていて第九葉以下が発見できないものは、必ずしも未完とは限らず、完成稿の後半が失われたとも考えられるので、末尾に「未完」と注記せず、「以下欠文」と注記した。

新たに書き下されたものは、現在発見されている限りでは、「大きな蟹の話」から「アンコルワットの戯書者について」までの一一篇、および小篇の中の「無帽塔と浮島」から「蛙を用いて毒を試む」までの七篇、計一八篇である。その他の手稿の執筆された経緯等については、それぞれの篇末の注記を参照されたい。

テキストには、原則として著者の自筆稿を用い、自筆稿のないものは、乾元社等で作られた筆写稿を用いた。篇末に特に注記したものを除き、大部分は南方家に所蔵されていたものである。

なお、未発表の草稿であっても、すでに発表されたものの続篇として、本全集の既刊の巻に掲載したものは、本巻には収録しなかった。例えば、第三巻の『不二』の「月下水人」二および三、第四巻の『紀伊史料』の「加太の立て権」二、第五巻の『ドルメン』の「西濃のヤマノコ」について「続稿である」。

目

次

凡例

新聞隨筆

田辺隨筆

白蟻 5 千里眼 6 同盟罷工のこと 18 摩利支天 18 ウィグルのこと 20 食蛇鼠 21 王陽明と平

田篤胤 22 神社合祀 23

田辺通信

オニゲナ菌 33 煤煙の害 34 蜻蛉の脚 35 古社の滅却 36 毒虫問題 37 蟻が陰囊を咬む 39 ダリヤ
の花 40 天長節の花 43 強姦されたと偽訴した婦人 44 平家蟹の話 47 同性の愛に耽る女性 61 情
事を好く植物 66 瓦猴について 72 鳴の羽搔 75 桜島爆発の余響 79

南方先生百話

金屏風と米騒動の話 85 南方先生自叙伝の二、三節 87 鯨の話 103

緊急広告

緊急広告に酷似の表示

菌学に関する南方先生の書簡

自然保護に関する南方先生の書簡

熊野三山と關鷄社付紀念植樹について南方先生の書簡 118 奇絶峽と南部の神島、湊村横手八幡社
趾保護に関する南方先生の書簡 120

118

114

112

111

85

33

5

「万呂村天王池養殖談」を読む	122
岩田村大字岡の田中神社について	126
三郡製糸会社設立許可条件について	140
三郡製糸会社に関し謹告	146
田辺町湊村合併に関し池松本県知事に贈れる南方先生の意見書	148
南方熊楠翁の書簡	170
新庄村合併について	183
オガタマの木について	217
防火樹	222
花さく庭木の話	229
四月に花さく庭木 ²²⁹	
五月に花さく庭木 ²³²	
六月に花さく庭木 ²³⁶	
七月に花さく庭木 ²⁴²	
草花伝説	248
草花の話	254
五月の末に咲く草花 ²⁵⁴	
きのうきょうの草花 ²⁵⁸	
七月にさく草花 ²⁶²	
このごろのくさ花 ²⁶⁸	
紀州田辺湾の生物	276
小 篇	295
周参見から贈られた植物について ²⁹⁵	
支那の鰐魚について ²⁹⁸	
鹿と緬羊 ³⁰⁰	
トガサワラの産地と 墓岩について ³⁰¹	
「谷ぐく」という古名 ³⁰³	

人魚の話	305
財産分けの話	312
兎と亀との話	317
鳥を食うて王になった話	323
鼠一疋持って大いに富んだ話	350
東牟婁郡諸川村の須川氏について	356
魚の口より錢を得た話	362
小 篇	374
竹馬およびホニホロ	374
法螺吹きを彦八と呼ぶこと	377
馬子を救った河村瑞軒	378
未発表手稿	383
大きな蟹の話	383
安宅関の弁慶	388
人死する前に葬送現わること	392
人死する前に哭く妖精	395
自分を観音と信じた人	400
巫が高处に上る	410
神の男女を誤る	418
俵の字	423

仏が癪人と化現したこと	427
吝嗇漢を放蕩に導いた神	431
アンコルワットの戯書者について	437
与次郎人形とお花独楽	442
古谷氏の謝意に答え三たび火斎珠について述ぶ(上)	470
春駒	487
猫 又	502
穴一つで男と女を捕えた話	509
釜煎りの刑	520
坊主と御殿女中	537
失うた帳面を記憶力で書き復した人	543
筑摩の鍋かぶり	547
夢違いの猥の札	551
名古屋山三郎	556
お万の方	561
紙子について	566
小 篇	572

無帽塔と浮島 572

守宮もて女の貞を試む 574

乞胸 577

狼が人の子を育つこと 579

桃栗三年 581

虎

の子渡し⁵⁸¹ 蛙を用いて毒を試む⁵⁸³ 読「夢想兵衛輪講」追加⁵⁸³ 立小便と廁籌⁵⁸⁵ 気合というこ
と⁵⁸⁸ 「牛の神話伝説」について⁵⁸⁹ 金札付きの鶴⁵⁹⁰ 謎を解いて金を獲た話⁵⁹² 再び根来のこみ
ちやについて⁵⁹³ 俳句と雅号のこと⁵⁹⁴

南方翁と日照権……………杉村

武……………597

南方熊楠全集 第六卷

